セミナー論文

『感情心理学研究』への道

—投稿を考えている人へのヒント—

中村 真 宇都宮大学国際学部

**How to publish your paper in The Japanese Journal of Research on Emotions:
The keys for preparing and revising a draft for the journal****Makoto Nakamura** (*Faculty of International Studies, Utsunomiya University*)

In this article, it was presented for the beginners how to write, to submit, and to publish a paper in The Japanese Journal of Research on Emotions. The efforts and the activities of the Editorial Committee of Japan Society for Research on Emotions for the last two years were reported as well as the statistics of the paper submitted and the ongoing reviewing process with the data describing the actual situations for each one of the papers. It was also explained that the progress of the implementation of J-STAGE web-based system supporting the paper submission and the reviewing process.

Key words: editorial committee, JSRE, J-STAGE

2008年12月13日に京都の同志社大学において、『論文執筆のスキル』と題して、第2回日本感情心理学会セミナーが開催された。筆者は、本学会編集委員会を代表して、『感情心理学研究』をターゲットにした論文執筆と投稿について、この2年間の編集委員会の取り組みの成果報告もかねて話をする時間をいただいた。せっかくの機会であったので、データを交えて、実際の投稿状況、審査状況、さらには現在進行中のJ-STAGE（「科学技術情報発信・流通総合システム」）を利用した投稿と審査の電子化について説明した。なお、本稿を執筆するにあたっては、基本的にはこのセミナーにおける講演に基づきつつも、データや電子化の進行状況については最新のものをお伝えするように新たにまとめ直した（セミナーでは2008年12月3日現在のデータを用いたが、本稿では2009年3月3日現在のデータを使用した）。

本稿は5つのセクション、すなわち、1.『感情心理学研究』の魅力、2. 投稿審査の状況、3. 投稿審査の仕組み、4. 優秀論文賞、5. 投稿審査の電子化、によって構成されている。念頭においている読者は、主としてこれから初めて論文を執筆し、学会誌に投稿しよう

と考えている人、もしくは論文執筆と投稿の経験がほとんどない初学者である。ただし、すでに十分な経験をつんでいる読者でも、初めて『感情心理学研究』へ投稿しようと考えている人、優秀論文賞や投稿と審査の電子化に興味を持っている人にとっても役に立つ情報を提供したいと考えている。そのような場合には、適宜関連のセクションを拾い読みしていただければありがたい。

1.『感情心理学研究』の魅力**1.1. 論文投稿先として優れている5つの特徴****(1) 審査のスピード**

学位論文提出の条件を満たすため、業績数の確保など、論文投稿の理由はさまざまであるが、自らの投稿論文がどのように審査され、評価されたのかを一刻も早く知りたいのは投稿者にとって自然な気持ちであり、投稿先を評価するための重要なポイントである。『感情心理学研究』では、迅速な審査を目指し、実現している。2007年度に新しい編集委員会が組織され、規程などが揃った2008年度の審査状況を見ると、ほとんどの論文が投稿受付時点から2カ月以内に1回目の審査報告を受けている。詳細については後のセクションで報告する。

Correspondence concerning this article should be sent to: Makoto Nakamura, Faculty of International Studies, Utsunomiya University, 350 Mine Utsunomiya, Tochigi 321-8505, Japan (e-mail: nakamura@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

(2) 全体的な論文のレベルの高さ

審査が早くても掲載される論文の質が低ければ、投稿先としての魅力も低下してしまう。『感情心理学研究』では1名の責任担当委員と2名の査読者による審査が行われており、審査基準も明確で、十分なレベルに達していない論文が採択されることはない。審査結果として「要再検討（差し戻し）」というカテゴリを作り、一定の基準に達していない論文は継続して審査をすることをせず、いったん差し戻して新たな論文として投稿するように促すシステムを作るなどして質を維持する工夫をしている。審査そのものは早くなったが、単純に採択の割合が高まるようなことにはなっておらず、後に説明するように差し戻しの評価を受けている論文も多い。

(3) 電子化と公開・検索対象化

『感情心理学研究』は、J-STAGEによりWeb公開されることになった。すでに、第14、15、16巻に掲載された論文はWeb上でも公開されており、今後発行される雑誌はすべて電子化され、公開される（現時点では、既刊の全巻が公開されている）。このような形で公開された論文は、高度なキーワード検索や、Googleなどの一般的で広範な検索エンジンの検索対象となっており、掲載された論文は発行と同時に全世界の研究者や関心を持つ人たちからアクセスされる可能性を有することになる。雑誌の中には一般への公開にタイムラグを設けるケースもあるが、『感情心理学研究』では研究成果が少しでも早く広く共有されることが重要であると考えている。

(4) 優秀論文賞

年度ごとに、掲載された原著論文から優れた論文1篇に優秀論文賞を授賞する規程が作られた（優秀論文賞授賞規程）。第1回の選考対象となった第15巻では、候補となる原著論文は7本であり、その中から1本が選ばれることとなった。今後投稿数と掲載数が増加することが予想されるが、いずれにしても非常に高い確率で学会によって定められた公式な賞を得られる可能性があることは、レベルの高い研究と論文作成の動機づけにつながることに加えて、評価が日常的になった大学などの研究教育機関への就職や職場における地位向上のためにも大きな魅力になる。

(5) 費用

『感情心理学研究』は他の学会誌と同様に、学会員であれば無料で投稿し、審査を受け、掲載されることが可能である。しかし、学会員であるための年会費は他学会が1万円台を超えつつあるのに対して、本学会は正会員で7000円であり、割安といえよう。さらに、論文掲載にあたり別刷りを注文する必要はなく、発行と同時にインターネット上に公開されるため、すぐにダウンロードしてファイルとして配布することも可能である（今回のセミナー開催の時点では、別刷り20

部を無料で贈呈する規程があったが、ネット公開されることになったことにより廃止された）。

1.2. 『感情心理学研究』が目指すもの

『感情心理学研究』は心理学を中心にしつつも、より広範囲の感情研究をその視野に入れている。参考までに紹介すると、編集規程第2条には以下のように記されている。

学会誌の名称は、『感情心理学研究』（英文名：The Japanese Journal of Research on Emotions）とし、心理学を中心とした感情の基礎的・応用的研究の発展を促進し、会員の研究活動の質的向上を図るとともに、近接領域における研究を推進し、その成果の普及、社会への還元に貢献することを目的とする。そのため、完成された研究成果はもとより、斬新な発想や将来性に富むすぐれた研究を発表するための場を提供する。

（編集規程 第2条）

さらに、学術的に意味があると認められる研究成果を発表する場を提供し、感情研究の発展に資することを目指しており、次のように非会員の投稿を認める規程条項もある。

学会誌は、原則として、会員の学術上の成果発表にあてるものとするが、本誌の趣旨に沿った研究成果の報告であれば、非会員による投稿も広く受け付ける。

（編集規程 第7条）

このように、『感情心理学研究』は感情研究の発展に寄与する研究を広く集め、掲載するための学術誌である。このオープンな姿勢は、本学会設立のきっかけとなった国際感情学会（ISRE: The International Society for Research on Emotions）の影響を受けたものといえよう。ISREは、心理学を中心としつつも、専門領域を問わず、哲学、思想、文学、政治学、経済学、社会学、生物学、生理学、医学などさまざまな分野の感情研究者が集い、研究成果を共有し、議論する場を提供している。今後、『感情心理学研究』により多様な分野の研究が投稿されることを期待すると同時に、その多様性がこの学術誌としての魅力になるように努めたい。

2. 『感情心理学研究』における投稿・審査状況 (2008年度)

2.1. 投稿状況

現在、論文投稿数は増加傾向にある。2008年度については、現時点で21件の投稿があった。内訳は、原著12件、資料7件、短報2件であった。それまでの数年は年間10数本程度であったため、大幅な増加傾向といえる（3月31日の時点で24本の投稿となった）。

2.2. 審査状況

上記の投稿論文21件のうち、2009年3月3日までに審査を終えている論文は14件である。そのうちの4件が「採択」に至っており、残りの10件は「要再検討」として差し戻されている。「要再検討」については後のセクションで説明するが、短期での修正が困難と見なされ、再投稿の場合は新規投稿として新たに審査を行うことを意味している。

一方、審査中の論文は6件で、ほかに取り下げられたものが1件あった。

(1) 1回目の審査期間

これまでに少なくとも1回の審査を終えている論文は14本である。そのすべてについて、受付から1回目の審査結果の通知までに要した日数順にリストすると、120日、117日、114日、69日、59日、57日、55日、53日、47日、46日、41日、35日、30日、27日となった。

30日を1カ月と換算し、1カ月単位でこれらの日数をまとめてグラフにしたものがFigure 1である。図からも明らかであるが、多くの論文の1回目の審査は2カ月以内に終了し、投稿者に結果が通知されており、最大でも4カ月以内には終了している。4カ月に近くなったケースについては、いずれも査読者の意見が大きく分れたために、編集委員会内での検討、さらに査読者を追加するなどの措置がとられたことによって時間を要したのであり、通常の査読や審査が漫然と行われていたわけではない。

これらのデータからもわかるように、『感情心理学研究』では迅速な審査が行われており、一般的には2カ月以内に1回目の審査結果が通知されると期待していただいよと考えている。

(2) 採択までの日数

現時点で採択されている論文は4件あり、採択までに要した日数を見ると80日が2件と150日、171日がそれぞれ1件であった。データが少ないために一般的な傾向などについて言及することはできないが、少なくとも現在までのところ、採択の場合は半年以内に決

Figure 1. 投稿論文の審査期間（1回目）

着がついている。

3. 『感情心理学研究』への投稿と審査の仕組み

投稿と審査について話を進める前に少しお伝えしておきたいことがある。おそらく多くの学会にもあてはまると思われるが、日本感情心理学会編集委員会の運営もアカデミックボランティアによって支えられている。つまり、編集委員、編集委員会事務局、査読者の誰一人として感情心理学会からは給与、謝礼に当たるものを提供されてはいないということである。さらに、これら関係者は、所属する組織においても重要な役割を果たしていることも多く、決してあり余る時間の一部をボランティアに当てているわけではない。それどころか、所属組織での教育や研究、さらには組織運営などの行政管理業務に関わる責務を果たしたうえで、残された限りある時間を使い、編集委員会の運営に協力しているのである。

このような学会組織の運営に携わる人たちのことを念頭に、論文の投稿やその準備を行っていただきたい。多くの好意の活動の上に成り立っている審査を、無料の添削システムのように見なして、原稿がいまだ不十分であることを自覚した状態で投稿することは、アカデミックボランティアに基づく学会運営のシステムに多大なる悪影響を与えるものであろう。

3.1. 投稿手続き

(1) 原稿の準備

原稿を執筆する際に、『感情心理学研究』に固有の準備は多くはなく、一般的な投稿論文の執筆の注意と同様である。あえて言えば、執筆投稿規程をあらかじめ確認しておくことと、規程に示されているように、日本心理学会が発行している『執筆・投稿の手引き（2005年版）』を参照しておくことが後の投稿の準備作業を進める上で効率的であろう。また、本節の（3）で説明するが、論文の区分については、自分の論文がどの区分に最も適しているのかをあらかじめ見極めて準備を始めることが重要である。

原稿そのものは、先行研究や専門領域の近い身近な研究者が評価している論文なども参考にして、まずは自分自身でしっかり書き、一定期間寝かせたうえであらためて自分自身で確認していただきたい。その次の段階として、共著者による原稿の確認と改訂、さらに第三者による確認と改訂を行うことが必要である。

共著者さえ確認していないと推察される投稿論文があることは、著作権や投稿倫理の観点からも大きな問題であるし、後に著者間の人間関係や組織内外でのトラブルに発展する可能性もあるため、くれぐれも注意を促したい。また、第三者による確認はいわゆる一つの査読プロセスに相当すると考えられるため、そのことで投稿までに時間がかかったとしても、結果的には

審査全体が順調に進み、短期間での採択につながる可能性が高まるといえる。

(2) 投稿の準備と投稿

第三者による確認を終え、原稿の準備が整ったら、いよいよ編集委員会事務局への投稿の段階になる。投稿は執筆投稿規程に従い、ファイルを用いた電子投稿の形でお願いしたい。

現在、J-STAGEを使用した電子投稿のシステムを準備しており、2009年5月末から使用を開始する予定である¹。2009年3月現在では確定していない部分もあるため、詳細についてはシステムが稼動してから実際の画面を参照してもらわなければならないが、基本的には、原稿（本文、要旨、図表）と確認書（著作権、倫理、英文確認など）を、ファイルのアップロードやウェブ入力形式で提出することになる。その際に、投稿者自身の氏名、所属、連絡先などの基本的な情報の提供が求められる。さらに、投稿システムへのアクセスに必要なIDとパスワードが投稿後に事務局から送付されるので、忘れないように管理していただきたい。

なお、投稿と同時に審査のプロセスも電子化されることになっており、投稿者は自分の論文の審査プロセスがどの段階まで進んでいるのかをWebにアクセスすることによってリアルタイムで確認できるようになる。

(3) 論文の区分

『感情心理学研究』に掲載される論文には、原著、短報、展望、資料の4種類とその他という区分がある。その内容は、編集規程第5条によると次のようになる。

原 著：オリジナルな内容の実証的研究論文。

短 報：オリジナルな内容の実証的研究論文のうち、試験的な内容のものを短くまとめた報告。

展 望：特定の理論に関する論理的考察を展開した論文や、公表された先行研究を総合的に概観した文献研究的論文、レビュー。

資 料：興味深い観察や少数事例についての報告、研究の基礎的材料や情報を提供する論文。

その他：他の論文や理論などに対するコメント、依頼論文など、上記の区分には当てはまらないが、会員にとって有益と委員会が認めた論文。

(編集規程 第5条)

これらの区分は2007年度の規程改正により改められた。現在までの投稿論文を見ていると、必ずしもこれらの区分が十分に理解されていないと思われる場合もあるので、ここで補足の説明を行いたい。まず、論

文としていずれかの区分が他の区分よりも重要であるとは必ずしもいえないことである。あえて言えば、後述する優秀論文賞の候補となるのは原著論文であり、そのことに基づいて原著を他の区分と比較して優れているという言い方がなされる場合もあるが、比較はそれほど単純ではない。あえて言えば、短報は独創的だが試験的な内容であるなどの理由で（例えば、サンプル数が限られる、取り上げている変数が限定的である、など）、原著に満たない論文の区分であるということもできる。ただし、短報は、原著に比べると相対的に採択までの時間が短くなる可能性があるし、独創性が高いがために速報性を優先するような意味合いも含まれていることから、一概に他の区分より劣るとはいえない。

この短報という区分は新しく設置された。そのためもあると思われるが、短報と資料という区分を混同して投稿されていると思われるケースが散見された。これまでの『感情心理学研究』では、資料という区分が現在の短報的なものと見なされていたために、このような誤解が生じていると思われる。あらためて注意を促したい。

展望と資料については、編集規程第5条の定義にあるように、それぞれ独立した内容であり、その内容をよく確かめたうえでの投稿をお願いしたい。いずれかの区分が他の区分より優れていたり、劣っていたりするのではないということは、このように内容が独立したものであり、それぞれに価値があり重要なものであることを意味している。優秀論文賞が特定の区分を対象にしているのは、原著が最も数が多いことと、異なる区分の論文を直接比較することが困難なことによると考えてよいであろう。

なお、その他として、“コメント”という下位区分も明示している。これは特定の論文についてコメントする場合などを想定している。コメントのやりとりをきっかけに議論が盛り上がり、ある分野の研究が盛んになる、というような効果を期待している。

3.2. 審査とその流れ

(1) 審査プロセスにおける作業と審査の全体的な流れ

論文が投稿されてから、審査結果が通知されるまでの作業とその担当、および作業の流れはおおまかに次のようになる。論文の区分の違いにより、査読は2度までのもの（短報）と3度までのもの（短報以外）があるが、基本的にはすべての論文の審査がここに示した作業の流れで成り立っている。

- 1) 投稿受付：事務局・委員会
- 2) 担当責任委員の決定：正副委員長
- 3) 査読者の決定・依頼：委員会・責任担当委員・事務局

¹ J-STAGEでの投稿・審査は、実質的には2009年6月1日より開始した。

Figure 2. 編集委員会と投稿審査に関わる組織図

- 4) 査読報告：査読者
- 5) 審査経過・結果報告：責任担当委員
- 6) 報告内容の検討・決定（採否の投票）：委員会
- 7) 審査結果の通知：委員長・事務局

これらの作業の分担については、Figure 2の組織図に示したとおりである。事務局は委員会の対外的なコミュニケーションを仲介し、加えて、投稿論文が執筆投稿規程の条件を満たしているか形式的な判断を行う。委員会の主要な役割は投稿された論文が『感情心理学研究』への掲載にふさわしいかどうかを判断することである。この判断の手がかりを得るために、編集委員会は査読者に論文の評価を依頼し、査読者は投稿論文の評価に関する情報を委員会に提供する。感情心理学会編集委員会では、審査を能動的に行うことを重視し、編集委員会が最終的な意思決定のための機関として投稿論文の採否を決定する。つまり、査読者から提供された評価はあくまでも編集委員会での論文評価のための判断材料の一部であり、編集委員会における審議の結果、査読者の評価とは異なる最終判断に至ることもありうる。また、投稿者が修正原稿を作成する際に戸惑うことがないように、複数の査読者の意見を責任担当委員がまとめ、査読者間で指示が矛盾している場合などへの対応も明示するようにしている。

(2) 審査における評価の観点

編集委員会における投稿論文の評価基準は、抽象的には、第1節で引用した編集規程第2条に示されている。すなわち、心理学を中心とした感情の基礎的・応用的研究の発展を促進すること、会員の研究活動の質的向上につながることで、近接領域における研究を推進すること、成果の普及、社会への還元に貢献することのいずれか、もしくはそのいくつかを満たす必要がある。ただし、その際に、完成された研究成果はもとより、斬新な発想や将来性に富む優れた研究を発表するための場であることを明示しており、必要以上に保守的な評価を行うことは意図していない。

Table 1
形式に関する項目

1. 用語や表現の適正さ・統一性
2. 表現の明確性・分かりやすさ
3. 図表の適切さ
4. 欧文抄録の適切さ
5. 参考文献および引用の適切さ

より具体的な評価の観点としては、Table 1, 2, 3に示されている項目を査読者に示し、点数化を求めている。まずは形式的な評価項目として、1) 用語や表現が適正で、統一して使用されているか、2) 表現が明確で分かりやすいか、3) 図表の使用が適切に行われているか、4) 欧文抄録に必要な情報が言語的に問題なくまとめられているか、さらに、5) 参考文献が明示され、引用が適切に行われているか、という5つの点が挙げられる（Table 1参照）。

これらの評価項目は内容以前の問題であり、まず論文として必要不可欠な形式的条件を満たしているかを確認することでもある。本来ならこのような確認をせず、内容そのものを評価することに集中できるとよいのであるが、実際にはこれらの点が十分ではない投稿論文は多い。なお、これに先立ち事務局で投稿論文を受け付ける段階で、さらに基本的な書式などの確認が行われるが、この段階で書き直しを求められる論文も少なくない。投稿者自身だけでなく、編集委員会事務局にとっても時間のロスとなるので、執筆投稿規程を十分に確認して投稿されることを強く求めたい。

次いで、本来の評価基準とでもいうべき論文の内容に関わる項目である。Table 2に示されているように、論文の個々のセクションに関わる評価項目が5つあり、1) タイトルが本文で示されている研究内容や考察を適切に反映しているか、2) 研究課題の設定が適切でうまく行われているか、3) 研究方法が論理的で妥当であるとともに創意工夫がなされているか、4) 分析が妥当であり工夫されているか、5) 考察と結論が研究の目的や方法、分析と整合的で、曖昧ではなく明確に記述されているか、が評価される。投稿論文が採択されるためには、これらの項目のすべてにおいてある程度高い評価を得ることが期待される。

さらに、論文全体に関わる評価項目が5つある。6) 論理の展開に飛躍や矛盾がなく、説得力のある記述がなされているか、7) 論文に独創的で新規な内容が含まれているか、8) 論文が特定の理論などの限定された問題の検証にとどまらず、広範な先行研究の検討と複数の理論的背景を踏まえた広い視点から研究が計画され、結果の意味づけが行われているか、9) 関連する研究分野への貢献の度合いや応用の可能性、さらに、10) 特定の研究分野にとどまらず、広く社会に

Tabel 2
内容に関する項目

1. タイトルの適切さ
2. 課題設定の良さ
3. 研究方法の妥当性と工夫
4. 分析の妥当性と工夫
5. 考察と結論の妥当性と明確さ
6. 論理性
7. 独創性・新規性
8. 網羅性・包括性
9. 関連分野への貢献度・応用の可能性
10. 社会への貢献・応用の可能性

Table 3
倫理的問題に関する項目

1. 文献、データ、質問紙、尺度等の資料の引用に関して
2. 差別用語や表現等
3. 実験参加者や調査対象者への研究趣旨説明や同意の取り付けの有無

とって意味のある貢献や応用の可能性を有しているかが評価の観点である。これらについては、いくつかの項目で評価されればよいと考えられる。理想的にはすべてに高評価となることが望ましいが、一つの論文がこれらのすべての条件を満たすことはむずかしい。むしろいずれかの点に焦点を当て、その点について高い評価を得られるような研究が求められるといえよう。

最後に倫理的問題に関する評価項目であるが、Table 3に示されているように、1) 引用が適切になされており、剽窃や盗用といった問題につながる可能性がないか、2) 差別用語や表現が使用されていないか、3) 研究参加者への説明と同意に関して問題はないか、が確認されている。研究の倫理に関しては、近年関心が高まっており、多くの研究教育機関においても組織内での研究に関して、倫理委員会などが審査を行う手続きがとられるようになってきている。このような手続きを踏まえて研究を計画し、実施することによって、少しでも問題が生じる可能性を低くすることを心がけていただきたい。また、日本心理学会では、比較的詳細な倫理綱領を準備しており、近日常に公開されるものと思われる²。このような倫理綱領に加えて、アメリカ心理学会など海外の倫理基準も参考になる (American Psychological Association, 1992)。

これらの具体的な項目への評価に加えて、さらに個別の点についてコメントがなされ、最終的に採択、不

採択といった全体的な評価がなされる。この最終的な審査結果については次項で説明する。

(3) 審査結果

編集委員会では各投稿論文に対して一人の委員が責任を持って担当することとし、この役割を責任担当委員と呼んでいる。責任担当委員は二人の査読者による査読報告を踏まえて、担当論文に対する評価（審査経過・結果）を編集委員会に提案する。編集委員会での審議を経て、最終的に次の4種類のいずれかの審査結果が確定し、投稿者へ通知される。

A：採択（無修正、もしくは、わずかな修正のみで採択可能で、再査読は不要である。）

B：条件付採択（再投稿の後に改めて査読を行うが、適切な修正がなされれば採択可能と判断されるもの。初回審査後は3週間以内（短報は2週間）、2回目以降の審査後は2週間以内での修正等が可能でなければならない。修正と再審査のサイクルは初回審査を含めて最大3往復（短報は2往復）とする。）

C：要再検討（差し戻し。短期間の修正では採択を見込めないが、将来的には採択の可能性もある。査読コメントを踏まえて十分に加筆修正した上での再投稿を求める。この場合、再投稿された論文は再審査ではなく新規投稿として審査する。

D：不採択（多少の修正では採択が見込めないものの。本誌において掲載することが不適切であるもの。）

（審査規程 第8条より）

採択は、投稿論文が『感情心理学研究』への掲載に値し、掲載のために採択されたことを意味している。この場合、まったく修正の必要がないか、あったとしても誤字脱字などの修正や多少説明を補うなどの内容の変更を伴わないマイナーな修正である。

条件付採択の場合は、責任担当委員と査読者のコメントや指示を踏まえて3週間以内に適切な修正がなされれば採択される可能性があるかと判断されたことを意味している。ただし、採択が約束されているわけではないので、修正に問題がある場合には再度条件付採択になることもあるし、最終的に要再検討（差し戻し）と判断されることもありうることに注意してもらいたい。

要再検討（差し戻し）とは、将来的に採択の可能性があったとしても3週間以内での修正が難しいと判断されたということである。じっくり時間をかけて問題点などを検討し、修正して新しい論文として投稿することが求められている。要再検討という評価は比較的大きな問題点がある場合や原稿の準備が不十分である場合などがあるが、後者については投稿者が十分な準備をしていれば回避できる。

² 社団法人日本心理学会倫理規程（倫理委員会（編）、金子書房）が、2009年8月に発行された。

不採択は、現状では採択の可能性がないことを意味している。

3.3. 審査結果への対応

(1) 審査結果通知の読み方

まずは冷静に通知内容を読み、理解することが重要である。めでたく採択された場合には通知に説明されている指示に従い、印刷用の最終原稿を準備して期限までに提出すればよい。不採択にはいくつかの理由が考えられる。一つは内容が『感情心理学研究』にふさわしくない場合である。この場合は、論文そのものが優れていれば論文内容にふさわしい他雑誌へ投稿することを検討すればよい。他の理由としては、新しい知見がまったくない、倫理的問題がある、方法論的に重大な欠陥があるなどが考えられるが、いずれの場合にも現状では論文として大きな問題があるため、まったく新しい研究を計画する、新たな研究を追加するなどの対応が必要になる。

条件付採択の場合は修正結果を見てあらためて採択の可否について判断されるため、期限までに、指示に従い修正して再投稿する必要がある。また、要再検討は旧規程や他の雑誌における修正再審査に相当するが、『感情心理学研究』では修正に時間がかかると判断されたものであり、差し戻しとして返却し、いったん区切りをつける。再投稿の場合は新たな論文として受け付けることになっている。

(2) 編集委員会からの指示、コメントの確認

採択以外のいずれの評価の場合も、投稿者にはまず、責任担当委員の指示と査読者のコメントを十分に確認し、理解していただきたい。その際、投稿者だけではなく共著者や第三者も交えて検討することが重要である。検討に際しては、第一に、責任担当委員による審査結果の説明や投稿者への指示を確認し、そのうえで、2名の査読者による査読コメントを吟味するようにしていただきたい。検討のポイントは、2名の査読者のコメントに矛盾がないか、つまり、一方の査読者は高く評価し、他方の査読者は修正を求めているような部分はないかを確認することである。その後、あらためて責任担当委員の説明や指示の確認に戻り、その指示に従って改訂作業を進めることが望ましい。編集委員会では、2名の査読者のコメントに矛盾がある場合にはあらかじめどのように対応すべきかを検討し、投稿者に具体的に指示するようにしている。万一適切な指示がなされていないと思われる場合には、編集委員会に対して問い合わせていただきたい。

(3) 編集委員会からの指示、コメントへの対応

大まかに言えば、責任担当委員の指示を踏まえて、査読者のコメントに対応していただきたい。査読者の指摘した疑問には誠実に答え、説明することは当然である。ただし、自分の考えと査読者や責任担当委員の

考えとが異なることもあるので、その際には自分の主張を闇雲に押し通すのではなく、根拠を明示して意見を述べるように注意していただきたい。編集委員会としては、必要に応じて投稿者の主張を検討し、適切な対応をとるようにしたいと考えている。

4. 優秀論文賞

2008年12月23日付けで、『感情心理学研究』第15巻に掲載された論文の一つに、第1回の優秀論文賞が授与されることが決定された。優秀論文賞とは、感情心理学に特に重要な貢献をした論文を選び、表彰するために（優秀論文賞授賞規程第1条より）制定された賞で、第15巻より、各巻、すなわち年度ごとに『感情心理学研究』に掲載された原著論文を対象に選考が行われることになった。ちなみに、現在は第16巻の対象論文の選考プロセスが進められているところである³。

このような学会誌の論文賞は今となっては珍しいものではないが、学会から公式な賞を授かることのメリットは大きい。まだ就職前の投稿者であれば、就職時に重要な実績としてアピールすることにつながるし、すでに所属のある投稿者であれば、近年盛んに行われている業績評価項目に受賞実績を書き加えることはやはりプラスの評価につながる。具体的な目標があることは目の前の作業を進める動機づけとして有効であることに違いない。もちろんこのようなメリットの有無をとにかくいうまでもなく、優秀な論文を書くことは研究者として常に追求する目標であるとともに、社会から期待されていることでもある。投稿者には、ぜひ、優秀論文賞を目指してよい論文を執筆し、投稿していただきたい。

5. 投稿審査の電子化

日本における優れた研究開発成果をいち早く世界に向けて発信していくために、学会誌や論文誌を電子化し、インターネット公開していくことを目的に、独立行政法人科学技術振興機構（JST）によって「科学技術情報発信・流通総合システム」（J-STAGE）が構築された。J-STAGEは、具体的には学会誌を電子ジャーナル化し、インターネットを介して全世界から検索可能にするとともに、付随して投稿と審査を電子化するサービスを提供している。投稿と審査のプロセスが電子化されることで期待される効果としては、通信時間が最短ですむことによる審査のスピードアップ、査読の進行段階など審査プロセスのリアルタイムのモニターが可能になること、事務局や委員会の負担軽減などが考えられる。

『感情心理学研究』は第15巻から正式にJ-STAGE

³ 第16巻の優秀論文賞は1号に掲載された澤田論文に決定し、2009年度年次大会において表彰された。

によって電子ジャーナルとして公開され、検索対象となっている。同時に、アーカイブ化の対象にも選ばれ、既刊の巻号のすべてが順次公開される予定である⁴。現在、投稿と審査の電子化のための試行を進めている段階であるが、このまま順調に進めば、5月の感情心理学会年次大会の時期にはシステムを稼働させられる予定である。論文投稿の投稿や審査結果の通知などがますます早く、便利になるので、ぜひ活用していただきたい（5月末に年次大会にあわせて、J-STAGEによる電子投稿・審査システムが稼働した。日本語による電子投稿のリンクは次のとおりである。<http://ess.jstage.jst.go.jp/contrib/jsre/initialsubmission/char/ja>）。

おわりに

学位取得の条件として査読付の論文採択数が指定されたり、実績評価として年間の発表論文数の報告を求められたりすることもあり、投稿論文の数は近年大幅に増えているように感じられる。また、技術の進歩によって論文の執筆や投稿が簡便になり、投稿にかかる作業や費用などのコストも軽減されており、投稿そのものもしやすくなったといえよう。しかし、結局のと

ころ、求められるのは良い論文を書くことである。そのためには良い研究を行う必要があるし、執筆のために共著者間で調整を行い、第三者の意見を求めるなどのプロセスは必要不可欠であることから、基本的には全体として以前と変わらぬコストがかかると思われる。

冒頭で申し上げたように、『感情心理学研究』には論文を投稿する雑誌として多くのメリットがある。良い学会誌を作り、育てていくことにもつながるので、多くの論文が、それもぜひともコストをかけた良い論文が投稿されるよう期待するとともに、ご協力をお願いして結びの言葉としたい。

引用文献

American Psychological Association (1992). Ethical Principles of Psychologists and Code of Conduct, *American Psychologist*, **47**, 1597-1611.
(アメリカ心理学会 富田正利・深澤道子（訳）
(1996). サイコロジストのための倫理綱領および行動規範 社団法人日本心理学会)

(2009年4月1日受稿, 2009年5月10日受理)

⁴ J-STAGEによるアーカイブ化は終了し、すでに公開されている。第1巻1号から最新号に至る『感情心理学研究』に掲載されたすべての論文をWeb上で検索し、読むことができる。